令　和　6　年　度

宮崎国際大学　国際教養学部

指定校推薦

試　験　問　題

【小　論　文】

受　験　番　号
氏　名

国際教養学部　小論文

問題

次の文章は、文化人類学および民俗学の研究者である高橋五月（たかはしさつき）さんが、SDG s （Sustainable Development Goals）を念頭に置きながら、「多様性」について述べたものである。高橋さんの意見を要約し、それに対するあなたの考えを６００字以内で述べなさい。

あなたは多様性と聞いて、どのようなものを想像するだろうか。世界各地に住む様々な人種の人びと、もしくは自分が慣れ親しんでいる日常とは違ったかたちで生活をしている人びとのことを思い浮かべるだろうか。もしかしたらあなたは、人間以外の動植物について思いを巡らせるかもしれない。人種の多様性、文化の多様性、生物の多様性、その他にも多様性にはいろいろなカタチがある。では、私たちがすむ世界をより持続可能なものにするために、私たちは多様性とどのように向き合うと良いのか。

まず第一歩としては、自分とは異なる「何か」を持って生きている存在を認めるということが大切なのだと思う。色々な考えがあり、色々な生き方があっていい。こうした多様性に寛容な姿勢が広まれば、世界はもう少し生きやすい場所になるのではないだろうか。しかし文化人類学者の松村圭一郎が指摘するように、そこで立ち止まってしまっては、本当の意味で多様性について向き合っていることにはならない。なぜなら「色々」を認めるだけでは、私は私、あなたはあなた、と線引きをして世界を細分化するだけで終わってしまうから。

ではどうすれば良いのだろうか。私が考えるもう一歩先に踏み込む方法は簡単ではないが、可能であると思う。それは相手の話に耳を傾け、同意しなくてもいいからその人の言っていることについて知ろうとする姿勢を持ち、真剣に考えることだ。こうした対話を重ねることで、個々が細分化した世界から、個々が繋（つな）がる世界に変わっていくのではないだろうか。

もう一つ、多様性について踏み込んで向き合うために大切なことがある。それは、多様性と「わたし」の繋がりを考えることだ。多様性のことを考えるとき、私たちは自分以外の存在のことを想像しがちである。しかし、多様性と向き合うということは、自分と向き合うことでもある。私たちはどこに住んでいても、周りの人、動物、ものたちと会話をしたり、触れ合ったり、音を聞いたり、見つめたり、色々な方法で多様性と関わり合いながら「わたし」を形成している。そのことに気づき、思いを巡らせることも多様性と向き合うための大切な一歩なのではないだろうか。

多様性と共に生きる世界を目指すことと持続可能な世界を目指すことは密接に関わっている。多文化共生、多種共生、そんなきれいごとができるのか？という意見もあるかもしれないが、可能性はある。

ただし、多様性と共に生きる世界の探求には終わりがないということも心に留めておく

ことが大切だ。SDGｓにも同じことが言えるだろう。名称に「ゴール」が含まれているので勘違いしてしまいそうだが、持続可能な世界の探求にゴールは永遠に訪れない。問題が深刻すぎるからではなく、常に周りの自然や社会環境の変化に伴って様子を変えながら存在し続けるからだ。そのため、常に探求し続けることが重要なのだ。多様性との共生や持続可能性を実現するために私たちが大切にすべきことは、ゴールの実現を夢見ることではなく、身の回りの「わたし」を含めた様々な繋がりを観察し、対話し、考察し、悩み、行動することを繰り返し続けることなのではないだろうか。

（高橋五月「多様性と共に生きる」による）